

## 【講演】 今村力三郎訴訟記録の刊行の経緯

専修大学理事長・前専修大学法科大学院教授 日高義博

今日は、お忙しいところ本当にありがとうございます。座って話すと何か調子が狂うんですね、いつもこうやってマイクを握って話すんで。少しご勘弁いただきましたと思います。

### I はじめに



日高義博先生

「今村力三郎訴訟記録の刊行の経緯」というタイトルを付けたのですが、後で、しまったと思いました。この歳になると記憶をたどるのに大変でして。室報等はやっぱり貴重でした、記憶をたどるのに。皆さんが折々に経緯を書いていたのが、記憶を復元するのに役立ちました。今まで室報に記録を蓄積してきたことは、大変貴重な財産だと思います。

私は、昭和45年に専修大学法学部を卒業したのですが、在学中は今村先生の名前を、大変罰当たりですが、あまり知りませんでした。大学院に行ってから、たまたま刑事事件の内乱罪のところを調べると今村先生の名前が出てきました。こんな立派な先輩がいるんだと、大学院時代に知りました。昭和50年に専修大学に専任講師で戻って来ましたが、そこからが今村法律研究室との関わりであります。当時は、法学研究所と今村法律研究室の実動部隊がいなくて、助手、専任講師が手分けして、両方の予算、決算の書類を作成するなど、いろんな作業をしました。事務局がなかったものですから、若手は大変でした。そのうち事務局ができるようになって作業が楽になったんですが、5年間ぐらい、昭和55年ぐらいまでは、大変な時代でありました。

## Ⅱ 訴訟記録整理の手始め

訴訟記録の刊行をしなければいけないというのは、研究室の立ち上げの時からあったと思いますが、刊行事業が動いたきっかけは、砂田卓士先生だったと思います。砂田先生が室報を発行されたのは、私が大学に戻る1年前の昭和49年ですが、その頃から、刊行事業を念頭に置かれたのだと思います。今村法律研究室ができたのは、これも砂田先生が書かれていますけれども、昭和24年です。同年10月に創立総会で立ち上げたといわれています。今村法律研究室の主たる目的は、司法試験の指導と室員の相互研究ということでスタートしていますが、その時は訴訟記録の刊行というのはまだ掲げられていません、まだ今村先生がご健在の頃ですから。私の記憶では、生田校舎で、大学の1年の時に今村法律研究室主催の刑法の講義を聞いたことがあります。この頃も、司法試験の受験指導が行われていた時期だと思います。

私が専任講師になってすぐだったように思いますが、砂田先生に、刑法の研究をやっているから訴訟資料を整理しなさいと言われました。軽く引き受けて、今村先生の訴訟記録や蔵書が置いてある電動書庫を見たとき、しまったと思いました(笑)。膨大な量の訴訟記録をどうやって整理したらいいだろうと。まず、何があるか分からないという状態でした。今日持参したのですが、図書館が作った『今村力三郎訴訟記録目録』というのがありました。奥付の日付はないのですが、恐らく昭和30年代かなと思います。これが唯一の手掛かりです。目録番号と整理ボックスの番号は合致しているのですが、ボックスの中に何があるのか、大きな見出ししか書いてないので、分からない。そこで、訴訟記録の分量の多い事件はまずやめて、分量の小さいものからやろうと思い立ちました。

もう一つ、著名な事件から手掛けようと思ったのには理由がありました。風呂敷包みで原資料を貸していて、返ってこないものが結構あると聞いていました。本当かなと思ったんですが、実際あったんです。それから、記録も取らずに貸し出しているので、貸し出した訴訟記録の一部が抜けてしまったとか、結構そういうことがあったそうです。それで、著名な事件から着手し、現物の貸し出しはやめ、刊行した物を参考にしていただくことにしようと思いました。さらに、訴訟記録を整理・

刊行することが学内の研究者の研究発信の場にしなければならないという狙いがありました。最初からいきなり、立派な今村力三郎訴訟記録集の書籍はできなかったのであります。

### Ⅲ 訴訟記録第1巻『金剛事件』まで

ここに持ってきました仮製本の『軍艦問題記録(前編)』は、今村訴訟記録第1巻『金剛事件(一)』の刊行準備のため、最初に作った試作品です。手元には1冊しか残っていませんが、現物をコピーして、まず読むに耐えるかどうかを作って見たのです。コピーして作るとしても、当時は大変でした。ゼロックスがそれほど優秀でない頃でありまして。これを作って何とかいけるかなと思ったんです。しかし、一つ困ったことは、刑事手続の変遷を過去に遡って調べなければ、金剛事件に関する訴訟記録の整理もできないという問題でした。

主要な刑事事件について、配布資料の2頁を見てください。金剛事件は、大正3年に起きた事件ですが、軍艦金剛を造るときの贈収賄事件であります。関連するものにシーメンス事件というのがありますけれど、それは軍艦金剛の内部の電気系統等に関する贈収賄事件です。金剛事件は、軍艦の本体を作る方のイギリスの造船業ビッカース商会とその日本総代理店の三井物産株式会社の贈賄事件、及び海軍軍人の収賄事件からなっています。民間人側の贈賄事件は、予審から始まります。しかも、その手続法は、旧々刑訴なんですね、旧々刑訴。実体法の刑法典はかろうじて現行法に繋がっています。そして、収賄した方の軍人側の手続については、訴訟法が別であります。つまり、旧々刑訴と軍法会議の訴訟手続を調べなければならなくなりました。私の世代の研究者までは、実体法と訴訟法と刑事学までは一通りやらないと研究者になれなかった世代ですが、現行刑訴は当然として、旧刑訴までは射程に入ります。しかし、旧々刑訴までいくと、まず資料があやしくなります。

軍刑法については、日高巳雄という人が書いた『軍刑法』(新法学全集24巻、昭和16年再版)という本があります。私と親戚関係はありませんけれども、その本を、古本屋が近いですから、見つけ出して軍刑法および軍法会議法の勉強も始めました。古本屋通いがいきなり始まりました。しかも、今研の予算があまりないので、こういう貴重な本は自分で買うという話になります。そんな折り、見つけたものに今村先

生の『帝人事件弁論』（昭和13年、非売品）という貴重な本があります。古本屋で見つけて、安く手に入れたと思います。探すと、古本屋街というのは、そういう訴訟記録の関係の本が見つかります。今村法律研究室でも、その後書籍を買っていただくようにしました。

話は前後しますけれども、今日持ってきましたが、昭和61年の今村法律研究室の蔵書目録をコピーしたものが残っています。記載された文字は、田口文夫先生の字だと思いますが、几帳面な字です。表紙のところ、これは庄菊博先生の字だと思いますが、若手があれこれやっていましたので、誰が書いたかよく分からないのですけれど、図書を使う場合にはノートに必ず名前を記入して使ってください、とこうことが書いてあります。この当時、今村法律研究室の蔵書は、ナンバーを見ますと260冊です。研究室の活動が本格的に動き出してから、10年ぐらいの頃ですけれども。これを見ると、訴訟記録に関係する貴重なものを買っています。

話を戻します。整理ボックスの中には、関係資料が雑然と入っていました。そのうちの一部で、コピーしやすいものをコピーしてみたのですが、これじゃ駄目だと思いました。予審手続に沿って審理し予審終結決定がなされ、その後、東京地裁に移り、上級審へと進むことになりますので、予審の取っ掛りのところから資料を整理して並べ替えることをポリシーとして、整理ボックスの中に入っている原資料を再分類することを始めました。これは、私が整理を間違えると全部飛んでしまう話なので、それこそ必死でやりました。訴訟記録を手続上の時系列に沿って並べ替えることを間違ったら、訴訟記録の刊行自体にヒビが入ることにもなりますので、神経を使いました。整理ボックスの中に入れてある資料は、刑事手続上の順序通りにはなっておらず、カードには書いてはあるのですが、資料と符合しなかったり、カードにない資料があったりする状態なので、まず、すべての資料を整理ボックスから出して手続上の時系列に従って並べ、どこから手をつけるのかを検討しました。先ほど紹介しました訴訟記録目録とカードが整理ボックスに貼付されていなかったら、訴訟記録の刊行事業はここまでたどり着かなかったと思います。

今村先生が亡くなられたのは昭和29年です。私も、顔を拝見したことはありません。側聞ですけれども、今村先生の訴訟記録の整理が始まったのは、昭和35～36年だったという話ですが、菱木昭八朗先生から経緯を聞きました。生田校舎の体育

館と言っても、今は跡形もありますが、私が学生の頃、生田校舎のいわゆる正門から入ると、左手に体育館がありました。その体育館に今村先生の訴訟関係等の資料を全部持ち込んで、大ざっぱに分けて整理ボックスに入れて整理をして、それから図書館に搬入したという話です。膨大な量の資料ですから整理ボックスに入れることさえ大変な作業だったと思います。これが一段目の整理作業だったんですね。訴訟記録を検索し使用するには、まだまだ不十分な状態だったと思います。一件書類だけは何とかまとめたとしても、全体的なことはとても分からないということで、だいぶ後ですが、平成7(1995)年になって、『今村力三郎文庫目録』というのが作成されました。

この文庫目録では、整理ボックスの中に入っていたものは大体記載されており、整理番号で振り分けられています。図書部長だった笹沼誠治さんに尽力していただいたお陰です。数年かかったんじゃないでしょうか。今の電動書庫に入っている整理ボックスには番号が付けてあり、その中にある訴訟事件にも通し番号が振ってありますので、分かりやすくなっています。現に電動書庫にあるものは、文庫目録に収録されています。しかし、その中にもないものが実は後で発見されます。また、実は記載されているけれども見つからないものがあったりしました。当時は、手作業の時代です。訴訟記録を受け入れたときに、大ざっぱな分類じゃなくて、かなりの時間と経費を要しますが、現物の単体1点ごとに番号を振って、事件ごとに整理しておけば、こういう状態にはならなかったのですけれど、訴訟記録の刊行をきっかけとして、訴訟記録の細部の整理ができるようになったというのが実情だと思います。

訴訟記録刊行の1番目は金剛事件ですけれども、当時の訴訟構造の難しさもありまして、大変でした。軍法会議の手続と一般の刑事訴訟法とが2つ走っているのです。有価証券偽造罪や詐欺罪等の成否も問題になっていますが、これらは事件の筋からすれば付随的な問題であり、核心的な問題は、贈収賄事件でありました。資料として記載されていた領収書を捜した覚えがありますが、機密費として重要な証憑であった領収書があるはずなのです。ところが、見つからないのです。贈賄の決め手になった機密費支払いを示した物証がない。これは困ったなと思いながらも、ないものはないのです。おそらく贈収賄の立証等に使われたと思いますが、今村先生

は贈賄側の弁護ですけれども、苦慮されたと思います。旧刑法では贈賄を処罰していません。現行刑法になってから贈賄行為を処罰するようになりましたので、訴訟においても、贈賄を処罰する理論的な側面と対価性の主張がなされたように思います。非常に印象深い事件でありました。

また、司法警察官の調書等もありました。今村先生が恐らく複写して取られたのだと思うんですけど、手書きなのですね。これが達筆すぎて読めない部分がありました。それをそのまま写真印刷するわけにいかないの、活字に起こしました。この資料は、読み下すのに大変な苦勞をしました。ただ、今村先生の弁論要旨だけは、これは写真版にする必要があると思い、『金剛事件(三)』に「今村力三郎弁論要旨及犯情論」という表題の下に写真版で収録しました。当初から、写真版で収録するものと活字に起こして収録するものとを振り分けましたが、貴重なものは写真版で収録する方針に従って訴訟記録の刊行を進めた次第です。

#### Ⅳ 『血盟団事件』刊行に伴う不明な資料の発見

次の訴訟記録の刊行は、血盟団事件と五・一五事件です。血盟団事件と五・一五事件は、同じ昭和7年の事件です。両事件の訴訟は、横にらみをしながら進行しましたので、どちらを最初に手掛けたのか記憶があやふやなのですが、おそらく五・一五事件の方からだったですかね。ちょっと調べてください。刊行の巻数を見れば分かりますので。

(フロアより：五・一五の方が先)

時系列に従いますと、血盟団事件から話した方が分かりやすいと思いますので、この事件から説明します。血盟団事件は、いわゆる一人一殺といわれた事件です。井上日召を首謀者として、財界、政界の主要人物を抹殺していこうとした事件です。根っこは社会変革を意図していた事件ではありますが、罪名は単純です。殺人罪および殺人幫助罪です。軍人も絡んでいますが、本件は民間人側の事件です。手続法は旧刑訴法です。旧々刑訴でなく、旧刑訴の下での事件でありました。もちろん、予審があります。

事件の争点としては、殺人の共謀共同正犯の問題もありますけれども、事件の筋はそんなに複雑ではありません。一番の争点は、五・一五事件の処理との関係もあり、

裁判官の忌避の問題でした。忌避のため訴訟が長引くのです。研究者であれば、尾後貫莊太郎という刑法の研究者を知らない人はいないと思いますが、当時陪席であった尾後貫裁判官が忌避された。それは、法廷でドイツ語の原書ばかり読んでいるというようなことなのですが、それは単なるきっかけに過ぎず、訴訟を引き伸ばす手段として忌避の申立てがなされたのです。そして、忌避の部分について抗告なされて上まで行きます。しかし、東京控訴院の吉田常次郎裁判官（後に中央大学の教授）により、即時抗告が棄却されました。そして、最終的には裁判官が替って訴訟が進行し、五・一五事件との連動が図られたという事件です。訴訟を引き延ばすとき、どういう手段が用いられるのかが見えた興味深い事案でした。

この血盟団事件の資料を整理していて不明な資料が一つありました。カードによれば、事件現場の見取図があるはずなんです。どこかにあるはずなんです、分からないのです。それを、訴訟記録資料を整理していた笹沼図書課長（当時）がを見つけ、私に電話してくれました。封筒の中に入っていたのです。それは、生々しい青焼きの殺害現場の見取図でした。この資料を調書と合わせて見ると、どういうふうに弁論を組み立てたのかがよく分かりました。この見つけ出した資料について、今村法律研究室報の25号や刑事法関係の雑誌にコメントを書きました。この見取図により、どういう形で銃殺したのかが分かりました。見取図は、三井銀行の玄関入り口において團伊玖磨が殺害された現場を描いたものですが、行為者が被害者團の後を付いて行って、玄関の階段で追い越し、振り返って体当たりをして、体を寄せ左心臓を撃っているのです。被告人の弁明では、胸の上に銃を当ててプツツという音がしたということが調書に書いてありますけれど、これを見ると、どうも下から突き上げて、胸の心臓の横に銃口を当てるとするのは難しい。恐らく下から心臓を貫通したのだと思います。

日本刀を使う場合もそうなのですが、即死に至らせるためには、お腹だったら冠動脈を切るのが常套手段。銃であったら、頭部のこめかみか心臓を貫通させる。脇差しであったら冠動脈を切断するように下から切り上げることになりますが、こういうことが実行できるのは、かなり訓練をされた人たちです。こういう生々しい現場記録が残っていると、殺意の認定の道筋が分かりますし、どういう事実を組み立てて弁論すべきかが分かります。行為者の殺意は否定できないでしょうから、弁護

側は苦勞することになるでしょう。一方、検事側は、検事調書の裏付けを得ることになり、事実認定に歪みがないということになりましょう。整理ボックスの中に入れるのが一つズレだけで、貴重な資料を見つけるのに大変な苦勞をするものだと思います。

## V 『五・一五事件』刊行のエピソード

五・一五事件は、金剛事件に次いで難解な事件でした。著名な事件であり、五・一五事件と神兵隊事件は、刑法の勉強をすると必ず内乱罪の朝憲案乱の目的に関する事案として出てきます。両事件とも著名な大審院判決が出されていますが、事案自体はものすごく複雑でした。資料の2の五・一五事件のところをご覧くださいと、軍法会議にしても、陸軍軍法会議と海軍軍法会議とに分かれています。軍刑法にしても、陸軍刑法と海軍刑法に分かれていました。行為者には、陸軍の軍人も海軍の軍人もいましたし、民間人もいました。軍人の場合は、陸軍軍法会議と海軍軍法会議に振り分けられ、民間人については、予審から東京地裁という流れで審理されました。したがって、併合審理はできなかったのです。管轄権が別々ですから。軍法会議での審理は先に進んで結論が出ますが、民間人側は、手続が伸びて、軍法会議の結論が出てから予審が終結し、東京地裁での審理に移行することになりました。

この裁判の流れについて、皆さんもおかしいと思われるでしょうが、内乱罪の事案だったら、管轄権は東京地裁にないですね。現在では高等裁判所が管轄権を持っていますが、当時は、内乱罪の事案は1審で終結であり、大審院がその管轄権を持っていたわけです。地裁の判決では、そもそも内乱罪の問題を取り扱うことができないはずですね。ところが、この事件の面白いというか、研究者として面白いのは、大川周明他は、我々は単なる殺人の目的というような、そんな小さいことで犯行に及んだのではないと主張したのです。国家体制を変える意図でやったのだから、内乱罪で裁かれるのであれば承服するけれども、殺人幫助というのは本意ではないということです。被告人たちが重い内乱罪の方に持って行こうとしたことから、大審院では内乱罪の問題に言及せざるをえなかったのです。

先ほど、軍人側は軍刑法で裁かれたと言いましたけれども、陸軍刑法にも海軍刑法でも反乱罪の規定がありました。反乱罪イコール内乱罪だったら簡単なのですね

れど、反乱罪は、刑法の国家的法益に関する犯罪である内乱罪のほか、社会的法益に関する犯罪である騒擾罪をも含む犯罪類型でした。現在では、騒擾罪は騒乱罪という罪名に変更されていますが、国家の基本組織を破壊する目的を必要としない犯罪であり、烏合の衆による騒乱を処罰の対象にしています。軍刑法の反乱罪は、この騒乱罪に当たる事案まで対象にしていたのです。

軍法会議では、軍律に違反し、反乱罪に該当するとして行為者たる軍人を処罰したのですが、刑法との関係は踏み込まなかった。それで軍法会議での裁判は、終結しました。軍法会議が結審した後、民間側の裁判は、東京地裁、そして東京控訴院へと移行しました。被告人側の主張は、正犯が反乱罪なので、民間側では内乱罪を問題にすべきだという主張になったのです。そのため、大審院では、内乱罪の目的に言及せざるをえなくなったのです。大審院は、内乱罪が成立するためには朝憲紊乱の目的が必要であり、その目的は直接的なものであることを要するとの判断を示しましたが、この点が有名な判例となりました。被告人らには、国家の基本組織を破壊するというような意図は求められない。内閣を打倒するという目的は認められるが、それは、内乱罪の目的の直接性が認められないとして、殺人罪との関係で処理すべきだとしたのです。

事件の処理の仕方としては、正犯が軍人ですから、その幫助犯等は正犯に従属するものと考えられます。刑法65条の共犯と身分の規定を適用するならば、同条1項により反乱罪の幫助とするのが理論的な筋道と思います。しかし、その処理の方法は、遮断されています。被告人らに内乱罪の意図はないとして、殺人および殺人幫助で処理するという終結の仕方をしました。さらに、軍法会議に移送することはしなかったのです。おそらく、軍法会議法の特殊性が考慮されたのではと思います。

訴訟の手続が陸軍軍法会議、海軍軍法会議そして刑事訴訟法と3つのものが走っているというのは本当にややこしいと思いました。そのために、民間人側の刑事手続は、他の手続の進捗を見ながら審理が進められた。五・一五事件の主要事実は、殺人および殺人幫助であり、内乱の問題ではないけれども、いわば傍論の部分が大審院判例として脚光を浴びるものになったのであります。考えてみますと、内乱既遂で処罰された事件は一件もありません。内乱が成功しますと、国家が転覆したことになりますので、刑法の存立基盤は飛んでしまいます。当たり前のことなのです。

けれど、現行刑法では一件も崩壊していませんが、間接的な争点の中で内乱罪の著名な判例ができたのです。これも、訴訟記録を整理・検討していて分かったことの一つです。裁判の流れの中で、証拠固めにより事実動くものであり、事実が動くとな法的争点も変化し、主論だけでなく傍論からも重要判例が形成されることを実感しました。

今村訴訟記録『五・一五事件』は全部で4巻なのですが、一番大変だったのは『五・一五事件(四)』に収録した、今村先生が作られた新聞の切抜きの編集でした。今村先生は、予審の始まる前の段階から、新聞記事を切り抜いてスクラップブックを作られていました。2冊ありました。小さい記事から大きい紙面の記事までありましたので、どうやって本の頁に収めるのか、苦勞しました。どうも紙面が大きくて、縮小しにくい記事が4～5件ありました。紙面割りが難しい記事については、こういう投げ込みの印刷記事を作って、何頁はどういう順序で読むかを説明するというので、何とか乗り切りました。また写真付の記事については、写真に貴重なものがありますので、すべて写真版にして復刻することにしました。

それから、この訴訟記録の中に、研究者として面白い論文が一つありました。弁護士でかつ刑事事件に詳しい方が、『五・一五事件擬律要綱』（今村訴訟記録第7巻『五・一五事件(四)』36頁以下に所収）というものがありました。著者は、弁護士の鈴木富士彌という方です。現物は、謄写版を製本したものでありましたので、これは活字にしなきゃいけないと考え、文字を起こして活字に組み替えました。読み下しが大変でした。『五・一五事件(四)』の「はしがき」を見ますと、坂本武憲先生をはじめ、庄菊博先生、田口文夫先生に校正を手伝ってもらったのですね。活字に起こしたところは、丹念に校正しないと資料としては使えませんので、若手の総力戦でした。当時は、活字に組み直すもの、写真撮影を要するもの、活字がきれいなもので写真印刷をするもの、というような分け方をして訴訟記録の整理をしました。五・一五事件の訴訟記録の刊行後は、スムーズに振り分けができるようになったと思います。当時、製本は、まだ専修大学出版局ではなく、神田三崎町にあったケイ・エム・エスという印刷会社でした。そこに何度も出向いて校正しましたが、担当の方には丁寧な対応をしていただきました。最後の頃は、私1人で半日詰めたこともあるのですが、写真の配置や順番が間違っていないか、細かなチェックをしました。今では、

大変思い出深いですね。金剛事件そして五・一五事件の刊行ができたときは、私自身も感無量になりました。

五・一五事件の訴訟記録の刊行は、費用がかかりました。一番分厚いのが『五・一五事件(四)』です。当時の今村法律研究室の室長は菱木昭八朗先生でしたが、軍資金はどうにかするから刊行しなさいと言われました。太っ腹ですね。本当にどうにかされて、五・一五事件の訴訟記録の全4巻を出版することができました。当時の予算では、とくに4巻目が写真版の頁が多くて出版が困難でした。おそらく、当時の理事長、学長が大学にとって重要な事業だと認識されていたので、予算を付けていただいたのだと思います。有り難いことでした。

今、理事長ですが、ちょっと待ってくれと言いそうですが、当時はおおらかでした。本学にとって貴重な訴訟記録であり、訴訟記録の刊行にどんな意味があるのかを、説明に出向いた記憶があります。その後は、予算通り動いていると思いますが、五・一五事件の刊行は物心ともに苦勞しました。

## VI 『神兵隊事件』に対する大審院の判決

次に、昭和8年の神兵隊事件について話したいと思います。昭和8年当時の手続法は、旧刑事訴訟法です。それに、本件では、大審院の特別権限に属する事件の種類を定めた裁判所構成法50条2号が問題となりました。殺人・放火予備等の事案として東京地方裁判所の予審に付されていましたが、大審院の特別権限に属する内乱予備罪として審理されるべきものとして、管轄違いの決定がなされ、大審院検事局に移送されました。その後、大審院の審理するところとなりました。大審院は、結論としては内乱予備罪の成立を否定しましたが、再び東京地裁に移送することなく、1審にして終審とする処理をしました。すなわち、内乱予備罪が成立しないことから、殺人予備罪、放火予備罪の成立を認めた、その上で被告人等全員を刑の免除とする旨の判決(大判昭和16・3・15刑集20巻263頁)を下したのです。この処理の仕方は、若干問題ではありますが、事件処理に8年を要したことを考えると、一つの解決方法であります。

法的争点であった内乱予備罪について、大審院はその成立を否定しました。その論拠は、朝憲紊乱の目的について、被告人らには目的の直接性が欠けているという

点にありました。この論拠は、五・一五事件についての大審院判決を受け継いだものです。社会的背景の変動の中で、血盟団事件、五・一五事件、そして神兵隊事件と続けて起きた昭和前期の大事件は、その後、二・二六事件が勃発する時代的な背景になったものです。今村先生は、3つの刑事事件の訴訟に関わられましたが、当時の訴訟手続が複雑で、しかも予審が重要な意味をもっていた訴訟構造にあって、一部分が犯罪不成立になったり、求刑と比較して宣告刑が軽いものになったり、刑の免除になったり、弁護人として量刑に尽力されたと思います。事件の解説では、求刑と宣告刑とを比較した量刑一覧を作成することもしましたが、弁護人側から見ると、最終的に量刑がどうなったのかが重要だと考えたからです。今村先生が残された言葉に、刑事事件については、「負けるべき事件に勝ってはならない、勝つべき事件に負けてはならない。」というものがありますが、このことを実践することは大変難しいことです。とくに、負けるべき事件において、弁護人はどこで勝負すべきなのかというと、酌量減軽であったり、刑の免除であったり、執行猶予だったりしますが、どこまで情状証拠を見出すことができるのかが勝負でしょうね。今村先生の数多くの弁論を読むと、苦心されているのがよく分かります。

## Ⅶ 『帝人事件』全員無罪の弁護

それから、昭和9年の帝人事件ですが、これは、被告人全員が無罪になった事件であります。訴訟記録刊行の中で一番巻数が長いシリーズだと思いますが。予審終結後の東京地裁昭和12年12月16日判決において、全員が無罪となり裁判が確定をした事件ですけれども、事案の核心部分は、背任だと思います。ところが、贈収賄関係が絡んだことから、政治的にも贈収賄の部分が脚光を浴び、注目された事件です。当初の予審請求のときの事件名は、「背任被告事件」でしたが、続いて瀆職（収賄）の予審請求がなされたことから、一大疑獄事件として注目を浴びたものです。

帝人事件の争点が、瀆職の予審請求がなされたことでズレてしまったように思いますが、贈収賄については、職務関連性が認められなかったことから、背任罪の成否が争点として残りました。東京地裁は、背任罪の成立も否定したのですが、背任の定義をどのように措定したのかは問題になるところです。横領と背任との区別基準として、越権処分行為か権限濫用行為かというメルクマールに依ったものと思ひ

ます。権限はあるけれども、権限の濫用だということで立件されたのだけれども、権限内の行為だという判断により全員が無罪になったのです。今村先生が取り組まれた刑事事件の中で、全員無罪を勝ち取った事件として有名であります。私が大きく関わった訴訟記録は以上の事件ですが、全ての事件の判決については、巻末で評釈を加えました。

## VIII 刊行に携ってのことごと

訴訟記録を刊行し、部分的に現物を写真版して掲載したこともあって、専修大学の関係者や外部の方から訴訟記録に関連する資料をいただいたこともありました。大逆事件については、今村先生と同様に国選弁護に当られた平出修弁護士についての情報も得ました。本学の法学部教授であった刑法の平出禾先生を、多くの方はご存じだと思います。平出禾先生の父上が平出修だったのです。平出禾先生には、先生の手元に残っていた大逆事件の資料を室報に書いていただきました。室報の第2号（1976年3月）に掲載されている「今村先生と平出修」という論稿がそうです。平出禾先生は最高検検事を退職された後、専修大学に赴任されました。随筆がとても上手な先生でした。私が若い頃、平出先生とは研究室が同室でしたので、いろんな話を聞く機会がありました。

それから、今村先生が残された論稿に『芻言』（大正14年に執筆。その後、今村著『法廷五十年』（昭和23年）に収録されている。）というものがあります。手書の草稿を製本したものです。専修大学の図書館には1冊残っていたのですが、よく見ると原本ではなくて、コピーして製本してあります。原本はないものかとずっと悩んでいたんですが、今から7年ぐらい前になりますか。当時、東京高等裁判所の判事であった原田國男先生から電話がかかってきて、「日高さん、『芻言』があるんです。手元に。」「どうしてあるんですか」と聞いたら、大審院判事であった岡田秀雄先生（大逆事件である虎ノ門事件の大審院長）と原田先生が昵懇の間柄であったことから、貴重なものだということで頂いたのだそうです。原田先生を訪ねて裁判所に行って、『芻言』を見せていただいたら、直筆の原本なんです。すぐさま、「ください。」と言ってしまう（笑）。原田先生は、今村先生の直筆のものだから専修大学に寄贈しようと考えられていたので、快く手渡していただきました。7年ぐらい前の話ですが、

やっと今村先生の直筆の原本が戻って来たのです。訴訟記録を刊行し続けていなかったら、おそらく、原本が大学の今村文庫に戻ってくることもなかったと思います。原田先生には、後日、大学から感謝状を差し上げました。今後もこのような出来事があるだろうと思います。

大逆事件に関する資料は、紛失すると大変なので、重要な資料については電動書庫には入れてありません。私が訴訟記録刊行の作業を始めた頃には、すでに風呂敷包みにして図書館の金庫の中に入れてありました。大逆事件の訴訟記録を刊行するときに、資料をどこまで出すか悩みました。被告人等の親族の方々が生存されており、資料を公刊することで関係者の社会的名誉や名誉感情を害することもありうるので、慎重を期すべき問題なのです。実名の入っている戸籍謄本もあるので、裁判資料として明らかにされたものは、刊行の対象にしてよいだろうということで、大逆事件の訴訟資料を整理しました。

幸徳秋水の本、写真等も結構あります。資料の一部ですが、その所在が分からなくなったことがありました。これには困りました。図書館の人達もどこにあるのか分からないというので、私の記憶を頼りに捜しました。なんとか、見つかってよかったです。このことは、3年前のことですが、最終的に再度金庫を開けて、中を捜したら下の方から風呂敷包みが出てきました。いろんな物が混入していたために、分からなかったのです。風呂敷包みが1件書類なので、整理ボックスの中の資料のように何が入れてあるのか分かりません。風呂敷包みの中の資料を1点、1点カードに取って、整理しておかなければならないと思います。

## IX 手紙、散逸した資料、論稿の整理蒐集

あとは、今村先生の手紙ですね。これは全然手をつけていません。差出人が亡くなられて30年以上たっても、遺族がいらっしゃってオープンにできないものもあると思います。当初から慎重にやるべきだということで、整理もできていませんが、整理するとしても、今研だけではできませんね。大学史資料課の力を借りないといけないでしょう。また、歴史の専門家が読み解く必要のあるものもあると思います。今村先生の全貌を明らかにするためにも、いつかはやらなければならない仕事です。

それに、散逸した資料を取り戻す仕事もあります。さっきほど、風呂敷包みで貸

し出したことがあったことを話しましたが、戻って来なかった資料が古書市に出ていることがありました。法学部の教授であった高木侃先生から電話で連絡があり、原敬暗殺事件の訴訟記録1件を見つけたというので。業者の古書市に出される予定であり、現物の写真コピーを見せてもらいましたが、今村訴訟記録の一部だと私も確認しました。今村先生の法律事務所の表紙が付されていました。ちょうど学長職にありましたが、予算は何とかするから、買い戻してほしい旨を言いましたが、幸い高木先生の尽力により入手することができました。入手した原敬暗殺事件の訴訟記録は、現在、図書館で保管してあります。まだ、未整理なのですが、事件の解説までは書き終えないと、あの世には行けないと思っています。

そういうことが、他にないことを祈ります。訴訟記録の現物の貸出はやめて、刊行したものを貸出すという方針を立て、原資料を整理していくことは、適切だったと思います。そして、外部で見つけたものは、必ず買い戻すべきです。さらに、今村先生が雑誌等にかかれた論稿について、全てがリストアップされているといいのですが、いまではその作業も困難になっています。古書店で見つけたら、とにかく手に入れて寄付してください。幸い、神田ではそれが可能です。私も1点見つけました。『法律知識』という雑誌に今村先生が子殺しの事件の解説を書かれているのを偶然に見つけ、買って来たことがあります。この論稿は、室報(第6号)に再録しました。古書店街を歩くとまだまだ発掘される可能性はありますので、皆さん、散歩のときは是非、頭の隅っこに置いてください。歩いていただければ、地の利を得て訴訟記録も充実していくと思います。

## X 刊行に携って学んだもの

今村訴訟記録を整理しながら解説を書いていくという作業は、研究者にとって重要な意味を持ちます。訴訟記録を読み直すことで、生の事実がどうであったのか、生の事実の中からどの部分を法的争点として選択し、逆にどの部分を捨て、訴訟上の争点項として闘ったのかが分かります。事実の立証として争えない場合には、法的理論で闘うしかなく、よく見えます。最初から法的理論で闘ってはいないのです。事実の拾い方が争われる以上、事実およびその背景を丹念に拾わなければなりません。今村先生は、どういう生の事実を基にして弁論を組み立てられたのか、

訴訟記録を整理して分かります。実務家にとって、今村先生の訴訟記録は、極めて重要な資料だと思います。

社会的事実の中から法的事実を抽出し、それに関する法的争点を絞り込み、裁判の流れを組み立てることは、法律家として極めて重要なセンスです。今村先生は、優れたセンスの持ち主だったと思います。今村先生の直観は、まねできないところがありますね。

わが大学は、実務家になる学生を輩出できる大学ですから、訴訟記録の刊行を丹念に行うことは、研究にとどまらず、教育上も大事なことだと思います。私は、27歳から70歳になるまで訴訟記録に直接、間接に係わってきましたが、事実から理論を立ち上げることを学べたことは、本当によかったと思います。

私が整理・刊行した刑事事件は、戦前の旧刑訴、さらには旧々刑訴のもとでの刑事事件が主なものですが、今村先生の訴訟記録としては、民事事件もたくさんあります。民事の訴訟記録をどう整理するかは、ちょっと指針が立ちませんでした。民事事件の中で、民法改正とどう連動しているのかという視点で整理すると、また違った系統の資料整理ができるようにも思います。スタート時には、民事事件を整理する羅針盤を見つけるのが難しかったので、著名な刑事事件だけに絞って整理・刊行した次第です。

今村訴訟記録の刊行は、今研の重要な仕事になっていますが、スタート時には、司法試験の指導も行いました。これは、法曹を輩出し続けなければならないという思いがあったからです。この思いは、ロースクールの立ち上げにも繋がったと思います。また、法曹実務に就いている卒業生との懇親の場を持つことも、私が事務局を担当している頃は、OBからの寄付も頂戴して、よく開催していました。実務での面白い話をきいて勉強になりましたが、こういう場をもう少し工夫した方がよいように思います。新司法試験になってから、すでに法科大学院から150名を超える合格者を出しています。実務で活躍している卒業生との懇談の場を持って、専修法曹の横、縦の連携を図り、今村法律研究室の存在意義を周知する必要があるように思います。

## XI おわりに

脱線ですけど、今村法律研究室が立ち上がったときに、司法試験の指導をなされた一人は、刑法の団藤重光先生でした。このことは、資料の中で見つけました。以前、福田平先生と親しいものですから、福田先生に団藤先生の名前があったことを話したら、「いや、団藤先生が講義をされていて、忙しいから、君が行きなさいと言われて、私も専修大学で講義をしたことがありますよ。」という話を聞きました。団藤先生が講義をされたのは、勝本先生の関係かなと思いますが、はっきりは分かりません。

刑法の系譜からいうと、専修学校が明治13年に創立されたとき、旧刑法が公布されています。専修学校がスタートしたとき、旧刑法と訴訟法である治罪法の2つが立ち上がっていました。民法典もなくて、憲法も商法もまだ制定されていませんでした。犯罪は何時の時代でも起きますので、実定法の中でも刑法の制定は早いのです。旧刑法は、フランス刑法を継受しましたが、ボアソナードの影響が濃厚です。しかし、わが大学の創立者は、相馬先生にしろ、目賀田先生にしろ、ベースは英米法です。実定法である刑法の解釈となると、少し流儀が違ふということになるでしょうね。刑事立法や民事立法の指針としては、英米法の考え方が生きてくるでしょうが、すでに制定された刑法典を解釈するとなると、大陸法の解釈論が通用する。専修学校の刑法の講義を担当した一人として、江木衷の名前がいろんな資料に出てきます。江木先生は、英吉利法律学校（中央大学）と専修学校の両方で刑法の教鞭を執られていました。英吉利法律学校も彦根藩の人達が係わっていましたので、相馬先生との関係は密であったと思います。教授の陣容も相互に関係していたようです。今村先生は、江木先生から刑法を教わったのです。『法廷五十年』の中に書いてあったように思いますが、専修学校の近くに江木先生の下宿があり、今村先生はよく遊びに行ったという話があります。今村先生と江木先生が弁護士として法廷に立たれた事件もありますので、大変親しい関係だったように思います。江木先生は、ドイツ刑法を研究されていましたが、とくにベルナーの刑法理論の影響が見られます。今村先生の卒業論文である「刑制論」にも、江木先生が説かれたベルナーの理論の影響があるように思います。旧刑法は、明治40年代には、ドイツ刑法を継受した現

行刑法に変わりますが、そういう意味では、今村先生は、先端の刑法学の勉強をされたことになります。

また、泉二新熊、「もとじしんぐま」と読むのですけれど、奄美大島の出身の大審院判事であった泉二先生も、専修大学の教壇に立たれています。泉二先生もドイツ刑法の学派です。専修大学の場合は、刑法は、スタート時からドイツ刑法の影響が強かったと言えます。専修学校の法律科目の授業は、英米法色濃く、英米法の授業が展開されていますが、刑法の授業は独特な流れであったような気が致します。

予定としては、1時間で話を終わることになっていました。何とか役割を終え、軟着陸した感じです。私の刑法の最終講義「共犯の基礎理論」は、万葉集から始まって、万葉集で終わりましたけれども、今日は、真面目な硬い話になってしまいました。訴訟記録の刊行の経緯を話すのに、記憶が飛んでいるところがありますが、参考にして頂ければ幸いです。以上で終わりたいと思います。(拍手)

## 【質疑応答】

**司会：**先生ありがとうございます。せっかくですので、まだ聞き足りない部分とか、この点をもう少しというところがございましたら、どなたでも構いませんので、挙げていただけると良いかなと思います。

**フロア：**今、中公新書で筒井清忠という歴史家の書いた『戦前日本のポピュリズム』というのを読んでのですが、戦前で軍部やマスコミが世論を一定の方向に熱くさせた一つの系譜が、弱腰外交という、軍縮条約なんかのたびにマスコミと軍部が騒ぐ。もう一つは裁判が出てきて、まさに先生が担当された血盟団事件と五・一五事件と帝人事件なんかでは、青年将校の減刑嘆願書みたいなものが大量に集まった。その一方で、帝人事件が無罪になったので、やはり政党は腐敗していて、金のある弁護士を雇うと無罪になるみたいな世論が喚起されたということがあって。その本に参考文献が書いてなくてがっかりしたんですけれど、今、先生の話を知ったら、今村力三郎は当時のマスコミの新聞記事までスクラップしておられたと。ぜひあの本の著者にも読んでもらいたい(笑)。今村力三郎先生ご自身は、何かマスコミのスクラップされておられるんで、気にはしておられてたと思うんですけれども、何か対応されていたのでしょうか。

**日高：**今村先生自身は、政治的な問題には、かなり中立的に動かれていたと思います。当

時の新聞等で自分の見解を度々力説したり、裁判の途中で力説するというようなことは、スクラップブックを見てもないですね。

訴訟記録を刊行するとき、一つ指針にしたことは、刑事手続において客観的事実がどう動いたかをまず押さえるということです。社会的な動きを、そして事件をどう評価するかということは、政治学や社会学の視点に委ねて、刑法学者のやるべきことは、淡々と事実を整理して、淡々と事実の流れと法的評価を書くべきだと考えました。そのことが今村先生の思考に近いのかなというので、かなり抑えて書いているのですが、反論はあると思います。とくに大逆事件なんかは、1審にして終審であり、しかも死刑の執行は1週間後ですから、反論のしようがないほど、一般の人はあっと思ったでしょう。今村先生が自分の考えを力説されたら、いろいろ反響があったと思いますが、冷静です。幸徳秋水が死刑判決を受けて刑場に赴く場面を書いたものがあるのですが、幸徳秋水はミカンを渡されて、そのミカンの皮をきれいにむいて食べ、食べ終わったら皮を包んで、静かに刑場に行ったという描写があります。その描写から、幸徳秋水は侍だなと思いましたし、ああいう描写を書き留めることのできる今村先生の静かな目線を感じました。

裁判が偏向しているとか、政治的にどうだとか、いうようなことは、あまり書かれていない。今村先生は人権派の弁護士だと言われますが、事実に基づき、客観的に正しいと思われることを基本に据えて、人権を擁護するという立場は一貫して崩されていないと思います。8A会議室に今村先生の「履正無畏」（正を履んで畏れなし）という額が掛かっていますよね。今村先生の精神は、あの通りだと思いますね。変な圧力にも屈しないし、かといって情緒にも流されない。私なんかは、情緒に流される方ですけど。そういうところが今村先生の素晴らしいところかなと思います。実務家としては、法的な事実の切出し方がすごいですね。事件の筋道を描くのが、弁論要旨を見ているとうまいです。

**フロア：**一番最後に、興味のあることを先生にお話しいただきました。江木衷先生と泉二先生が教えにいられたということです。江木先生は当然いたんですけども、泉二先生まで教えにいられていたということ。確か戦前ですよ。いつ頃からいつ頃まで専修学校にいられていたのでしょうか。

**日高：**それは、断片的にしか分からない。非常勤講師、兼任講師の一覧表をずっと繰っていけば分かるはずですが、それが断片的にしか残っていません。学籍簿の原本は何があっても死守しましたので全部残っているのですが、関東大震災、第二次世界大戦に耐えて。しかし、講師の一覧表はみつからないですね。随筆等に書かれていることで、少しずつ分かる程度ですね。

**フロア：**そうですか。江木先生は明治期？

**日高**：初期です。最初のスタートですね。

**フロア**：そうですね。あの頃の本など持ってます。分かりました。ありがとうございます。

**フロア**：前の室長をやっていました松岡です。こういう貴重な訴訟記録の刊行をずっと続けてきていることは、かなり社会的にも注目が集まってきたと思うんです。このような歴史を、社会還元とか、学生への還元とかにしていけることを、先生はどのようにお考えですか。今の形態をずっと今村研究室が続けていくという感じをイメージで持たれているのでしょうか。他に何か、こういう方法があるとか。

**日高**：学生への還元ですか。

**フロア**：学生もありますし、社会からもいろんな問い合わせも多くなっています。今の形の訴訟記録の刊行という話は。

**日高**：訴訟記録は限りがありますので、刊行事業はいつか終わるはずですね。その後何をするかというのは、先生おっしゃったように、今村先生の生き方をどうやって伝えていくかということが、最後まで残ると思います。例えば、金剛事件について学生向けのシンポジウムを行い、当時の訴訟構造と現在の訴訟構造を比較検討させたり、弁護人の活動はどうあるべきなのかということを議論させたり、そういう活動はあるかなと思いますね。

ただ、手続法が複雑でね。現在の刑事手続と違って、3つの手続が平行して走っていますので、その訴訟構造から解説しないと、事件の流れが難解です。研究者にはすぐ分かるとしても、学生には難しい問題です。学生向けの解説も書いておりませんので。

血盟団事件から神兵隊事件、そして五・一五事件の刑事手続の流れについては、明治大学の法学部資料センターにおいて講演をしたことがあります。平成8年11月だったと思います。明治大学には友人の川端博教授がおり、川端さんから、専修大学の訴訟記録を手掛けているから講演してくれないかということで、2時間ほど話をしました。すでに、各事件について解説を書いておりますが、実際に話してみると、弁護士など実務家が多かったこともあり、大きな反響がありました。たくさんの訴訟記録が残っていること、原本、現物が残っているのに驚かれました。夢みたいな資料だと。

また、五・一五事件の訴訟記録を刊行したとき、資料を写真版にした部分があったことから、だいぶ後になってからですが、当時、日本大学の教授であった板倉宏先生から、有斐閣から本を出すのに、当時の法廷の写真がないので、写真掲載を許可してくれませんかという連絡がありました。当時、私が室長だった頃だと思いますが、出典として専修大学今村法律研究室という名称を明記していただくことを条件に許可しました。多くの刑法の研究者が、今村訴訟記録の刊行書籍をよく見られているのが分かりました。

松岡先生がおっしゃったように、専修大学の学生にも今村先生の偉業を分かりやすく発

信することも考えなければならないと思います。戦前の有名な刑事弁護人として今村先生がおられることを、知らない学生が残念ながら多い。今村先生がどういう人物で、どんな刑事事件に弁護人として活躍されたかを、学生向けに発信していないので無理のないことではあります。現在では、「専修大学の歴史」の授業が新領域科目の1つとして組み込まれています。大学史資料課の瀬戸口さんたちが中心となって頑張っていますが、講義の中では、専修大学は明治13年をスタートとしてどういう専門教育をしてきたのか、大学の理念、高等教育の変遷など、講義内容はだいたい定着してきましたし、受講した学生は、専修大学がどういう大学なのかを認識するようになりました。今村訴訟記録については、訴訟記録が残っていること自体を知らない学生もいますので、学生向けの発信方法を工夫すると、いろんな波及効果が生まれるのではないかと思います。

あとは、民事事件の訴訟記録を整理・検討する作業が残されており、大変ですが頑張った方がいいかな。民事事件の訴訟記録の中には、結構面白いのがあると思います。ただ、私自身は、整理の指針が立たなかったので手をつけませんでした。民法改正等に絡んだ事件や法解釈の論点に絡んだ事件が、結構あるのではと見ているんですけど。

**フロア：**民事事件についてはどういうふうにしていったらよろしいでしょうね。

**日高：**研究者の目線で一度俯瞰して見たらどうでしょうか。法改正に連動しているものや、解釈上面白いものが見つければ、そこから手をつけると良いのではないかと思います。面白くないものもあると思いますが、訴訟の進め方として参考になるものがあると思います。

**フロア：**文学部の大谷先生から、法律新聞を読んでも、時たま今村力三郎の民事事件が出てくるよということを伺ったんですね。ただ、あれ最初から三千何巻調べて、生産があるのかどうかいっても自信がないんですけども。

**日高：**砂漠に水をかけるような可能性があるのですが、刑事事件より難しいと思います。研究者は時間があるときに、電動書庫に行って眺めると発見があるかもしれません。読むのではなくて、眺めることから始めることが必要だと思います。

**フロア：**ここにいらっしゃる皆さんには、何かのときに見つけたらぜひ教えていただければ……（笑）。

**日高：**訴訟記録は、現在、整理ボックスで全件整理されていますので、どんな事件かはおよそ推測がつきます。整理ボックスの事件名を見て、面白いと思ったものは、中の資料を調べるというやり方をすると、刊行すべき民事事件の発掘もできるかなと思います。今日では、刑事事件では飯が食べません。民事事件で飯を食う方が多いことを考えるならば、民事事件の訴訟記録の整理・検討の方が有用かもしれません。

ただ、実務で判例を作っていくというのは、大変な仕事です。実務家にとっても、研究

者にとっても、大変な仕事です。私も職務上、労基法事件について傷だらけになりながら最高裁判例までこぎ着けましたが、渡辺章先生や宮岡孝之先生の絶大な尽力がなかったら有権解釈を得ることはできませんでした。宮岡先生は、その他にも数多く最高裁判例に係わっていますが、実務の現場は、精神的にも大変です。

**フロア：**私は違憲判決を大法廷で食らいました。

**司会：**司会の立場で僭越（せんえつ）なのですが、大学院に上がったばかりの頃、よく、専修の院出身の若い先生方から、「仕事なんだけれど」と言われ、活字に起こして組み上がってきたものが沢山持ち込まれ、「確認しといてね」と言われました。現在の今研室長であります内藤先生とかがよくお仕事を振られてこられまして、直した覚えがあります。私がやったのは血盟団事件だったので、よく覚えているんですが、その裏で先生がこんなに苦労されていたっていうことを初めて知りました。

**日高：**資料が読めなかったですよ、文字が。ほんとに読めなかった。

**司会：**ええ。もう一応活字に組んであるものであるんですけど、たまに「この字あるんですか」と言うと、本物はこれだよというのがきて。さすがに、たまに読めない字があったんですね。私も困りまして、日本法制史ですので、私の先生である鎌田先生にたまに、教を請うて、「合ってますかね」と言われて、お聞きした覚えもあります。

なので、やはり活字が起こせるっていうのが非常に大切なことでして、今後こういう作業ができる人が果たして残るのかなっていうことが。法制史や歴史のほうでも、もう活字しか使わない学生さんとかが増えているんですね。古文書も読まないっていう人たちもいらっしゃるんです。今やっておかなくてはいけない仕事なのかもしれない。読める人がいるうちに読んで、せめて活字にしておかないと、後の研究が成り立たないかもしれないというようなことを、ちょっとお聞きして感じました。

**日高：**そうですね。調書には達筆すぎる字で書かれたものがあり、読めないんです。民事事件なんかは、おそらく読めないものがいっぱいあるのじゃないかなと思います。

**司会：**江戸時代に比べて、こちらの近代のほうが、くせ字の方とか独自に書かれている方が非常に多いので、読みにくいかなと思ったりしています。こういうお話をお聞きすると、やはり技術としての伝え方もしなきゃいけないとも思いますし、研究を進めていくためにも、後者に発信していくっていう必要性があるのかなということを、ちょっとお聞きしながら考えてしまいました。

**日高：**手紙を復刻するときはぜひ必要ですね。早めにやった方がいいかもしれません。少なくとも、重要なものだけでも、早めに復刻した方がいいですね。

**司会：**ぜひ大学史の方々にご協力を賜って、しておきたいなと思ったりしています。

**日高：**手書きの文字を解読することは、私だけが苦勞したのではなくて、坂本先生なんかもそうでした。被害というのは変ですが、私1人ではないのです。平田和一先生もだいぶ使われたと思います。とにかく、若手が少なかったですから。すぐ上は、大先生ばかりですから、やって下さいと言われたら、実動部隊の若手は「はい」と言わざるをえない時代でした。

**日高：**こういう今村法律研究室のような特色のある機関は、あまりありません。実務と理論の融合領域を研究していくっていうものは、なかなか他の大学にはないですね。しかも、膨大な訴訟記録の現物を保持している大学というのは強みです。この特徴を活かして大きく発展してほしいと思います。

**司会：**先ほど先生が、これから学生たちにどういうふうに浸透させたいかということ、松岡先生もおっしゃってくださいましたことです。今年度の前期にありました「専修大学の歴史」の授業を受けていた私のゼミ生ですが、専修大学の成り立ちとか、先生がたの生き方とかに触れて大変感銘を受けたようです。その中の1人が、うちのゼミは後期は自分で自由研究を立ててゼミ生の前で発表するという形式を取っているんですが、代言人について発表しました。代言人制度から弁護士制度に変わるところの話でしたが、最後に、今村先生のかかわった事件やその生きざまについてを発表してくれました。ゼミ生一同もすごい感動して、そういうすごい先生なんだ、と。今村の研究室の名前だけは学校の見取り図の中とかでは見るけれど、これは一体何をしている所かというのを、やはり学生は誰も知らないんですね。そのため、学生たちはすごく感動して、その日の研究発表が終わった後の拍手が多分一番大きかったと思うんですね。

他にもたくさんの先生がいらっしゃいますよっていう話や、創設の4人の先生の話とかも、歴史のところでもお話しするし、ぜひ自分たちでも探してみてねということ、法制史の授業とかではしやすいんです。他の科目の先生方も、何かの機会のときに、ちょっと名前を触れていただければ、もしかすると興味持っていただけるかな。図書館に行ったらたくさんの図書記録が並んでるのを見て、これ何だろうって、ちょっとでも手に取っていただければ学校としてもいいし、これからのためにもなるのかなというふうに思ったりもしています。今日、沢山のお話を聞きましたので、授業の中に少し生かされればいいのかしらと私自身は考えているところです。

**日高：**今村先生に関する逸話を一つだけ。今村先生はこの神田校舎で亡くなられて、神田校舎から棺が出ました。靖国通りの向かいに「満留賀」という蕎麦屋があるんですけど、今閉まってますか。私が学生の頃の若女将ですが、晩年になってその女将から「今村先生は、あそこの校舎の一部に住まわれていたんです」と聞いたことがあります。その場所は、

今度新しく校舎が建つ土地の一部です。旧制大学から新制大学に移行するとき、運動場が足りなかったので生田キャンパスを購入しますが、軍資金がない。それで、今村先生の別荘と宅地、いわば全資産をもらい、かつ神田校舎の土地の一部を売却して軍資金を調達したそうですが、そのため、今村先生は、神田校舎で寝泊まりされることになったのです。ようやく、その際処分した土地を買い戻すことができましたが、約60年の歳月が流れました。今村先生の生活空間だった神田校地を復活させることができて、感慨深いです。大学は、50年以上まっても復活戦ができるのですね。

神田校舎の近隣の方々に、90歳、80歳になる方々は、大学の戦後間もない頃とか戦前の様子をよくご存じです。神保町の交差点の近くに「松雲堂」という古書店がありますが、そこのおばあちゃんは、昔は朝起きると神田校舎の入り口の上にあった時計がよく見えたと話されていました。また、「満留賀」のおばあちゃんの話も印象に残っています。靖国通りを走るチンチン電車の車掌さんが、「おばちゃん」って言って手を振って通るのだそうですが、それが専修大学の卒業生なんだそうです。また、有斐閣の近くに老舗の「山形屋紙店」がありますが、そこのおばちゃんから、私が版画の和紙を買いに行くと、「明治時代の専修学校の台帳が残ってるよ。」って言われて、「えっ、払っているでしょうね。まさか、踏み倒してないでしょうね」と言って笑いながら会話したことがあります。もちろん、全部支払い済みになっているのですが。山形屋紙店の開業は、専修学校の数年前だと聞きました。専修大学は、そんな話を聞くと、神保町に根付いた地域密着型の大学だと思います。いまでは、大学としては、神田神保町の地は、本当に得がたい立地条件だとつくづく思います。

**フロア：**現在、神兵隊事件の別巻を発行しているんですが、旧刑訴の本が何しろ少ないんですよ。先生もおっしゃっていましたが、今の方々、我々も含めて、旧刑訴も旧々刑訴も習ったことがないですし。はなから分からないものを調べた際に、先生は何を手掛かりとしてお調べになったか、ちょっとお聞かせいただければ。

**日高：**まず条文でした。どんな条文になっているのかが分からなかった。旧刑訴、旧々刑訴の条文は、結構見つけようと思えば見つかります。条文が分かれば、なんとか解釈はできます、研究者ですから。それと、自分で関係ある書籍を買いあさりました。図書館も、当時は当てにならなかった。今までは、図書館に相当量の書籍が集まりましたが。旧々刑訴の場合は、フランスの手続法の影響を受けており、予審もドイツの予審制度とちょっと違うのです。たとえば、大逆事件の場合は、旧々刑訴の時代ですから大審院判事が発令権を持っていますが、旧刑訴では検事総長が発令権を持ちます。予審手続の最初から異なります。細かいことですが、手続の流れに沿った資料の整理を行う上では、正確に分か

っていないと、訴訟資料の整理ができないのです。整理ボックスの中に混入している資料をどういうふうに分けていくのか、本当に悪戦苦闘でした。現行刑訴の勉強はしていましたが、旧々刑訴は本当に未知の世界の勉強でした。やはり自前で勉強するしかありませんでした。

**フロア：**国際法をやってますと、軍法会議とかは日本にはないですし、私も別に復活させていう立場で全くないですけども、管轄権がやっぱり違うっていうお話ありましたよね。軍法会議に係るか一般裁判所に係るかっていうのと、あと軍刑法でいくのか一般刑法でいくのか。それは全くもう人的に、軍人かそうでないかっていうところで分れているのですか。

**日高：**私の見た資料では、予審に入る段階で身分により管轄権が分けてありました。軍属についての管轄権は問題なのですが、調査した資料の事件では、行為者は軍籍のある者でしたので、最初から陸軍軍法会議か海軍軍法会議の手續に付されていました。予審の前段階から、軍法会議の手續が先に走るんです。手續上、あまり迷いがないので、手續の進捗が早いのです。そこで、軍刑法の適用による結論が決まると、後続している民間側の裁判が事件処理の整合性を取らなければならなくなります。軍刑法の反乱罪が刑法典上のいかなる犯罪と符合するのかを考えることになりますが、予審の段階で既に手續が別れ、一方は結審していますので、併合して審理することは困難です。今であれば、裁判所の事物管轄の問題はありますが、訴訟法は一つですので、刑法65条1項を適用して、反乱罪の共犯として処理することも可能でしょうが、そうはいかなかったのが五・一五事件の裁判でした。

**フロア：**そういうのは、戦前はやっぱり刑法で全部、刑法の教科書とかで書いてあるんですか。

**日高：**いや、書いてないですね。現行刑訴を念頭にしてみんな書いてるんで、書いてないですね。

**フロア：**軍法とかいうのはどこでやってたのですか。

**日高：**軍刑法は大学で講義していなかったと思います。日高已雄男という人の軍刑法の本を読んだんですけど、法曹資格を持っている人が軍法会議に係わっていますので、特別な法曹教育の道があったと思われませんが、はっきり分りません。すくなくとも、大学の法学部では、軍刑法の講義をしていないように思います。

**フロア：**じゃ、もうそれ、軍のやっぱり学校とか……。

**日高：**ええ、そうだったと思いますね。

唯一見つけて喜んだ軍刑法の本ですが、著者は全然親戚じゃなかった(笑)。古本屋街があ

りますから、幸いにしていろんな資料を見つけました。

**フロア：**今、旧刑訴、旧々刑訴の話が出ましたが、私も2つのある点をつなげようと思ったのではなくて、どうなっているんだろうっていう純粹な興味から、大学院生の頃、一橋大学の図書館の中をいろいろ歩いて当時の教科書とか探し回ったことがありまして、幾つかは買いました。それで、大学、東大にも少しはあると思うんですね。教科書、大学の図書館にあると思います。

**日高：**古い大学の図書館にはあると思います。ただ、昔の専修大学にはなかった。

**フロア：**軍関係についてですが、防衛省に行くとなるとありますね。

**日高：**ああ、防衛省にあるかもわかりませんね。

軍刑法の構成要件自体はそんなに複雑じゃないのです。問題は、手続ですね。手続が複雑です。

**フロア：**構成要件は同じと考えてよろしいんですか。

**日高：**解釈は大体同じですね。たとえば、軍刑法の反乱罪における反乱の定義を読むと、反乱罪は刑法典の内乱罪と騒乱罪を含むものだという理解はできます。そういう吸収関係の問題は別としても、条文を読むと、何を犯罪構成要件にしているのかは、あまり苦勞せずに読み取ることができます。刑法理論上の基本的な概念は一緒ですので。

**司会：**先生、言い足りないことございますか？

**日高：**いや、もう言い尽きました(笑)。最終講義はやや漫談的に終わりましたが、今日は、かなり深く、かつ広い専門的な話ことができました。教員退職に際し、思いの丈を述べる機会を頂き、光栄でございます。

**司会：**ずいぶん長いことお引き留めしてしまいました。本当に今日はありがとうございました。

**日高：**どうもありがとうございました。(拍手)